

和解の人称

The Grammatical Person of Reconciliation

川津 茂生 KAWAZU, Shigeo

● 国際武道大学
International Budo University



Keywords 先駆的二人称, もっとも深い動機づけ, 受容性, 神の存在証明

anticipatory second person, the deepest motivation, acceptance, proof of God's existence

ABSTRACT

人間のもっとも深い自覚は、罪と死という、自己における一人称と三人称の対立の深淵に、自己が立っていることの自覚である。そして、人間のもっとも深い動機づけは、その同じ深淵に立つ隣人を救済しようとすることである。隣人を救済するためには、人間は、先駆的二人称という、一方向性をもった受容性を持たなければならない。その受容性としての先駆的二人称は、他者を確立し、また、他者の共通感覚を生成して行く。時間是一種の受容性であるから、時間の存在は、受容性の原点である、神の存在を証明している。先駆的二人称は、一人称と三人称の対立を和解させる、和解の人称である。

The deepest self-awareness of the human being is the awareness of his or her sins and death, or the fact of standing on the abyss of the antagonism between the first and the third persons in the self. The deepest motivation of the human being is to save his or her neighbor who stands on the same abyss of the self. To do so, he or she has to possess the anticipatory second person or the attitude of the one-directional acceptance for others. Such acceptance will establish the existence of the others and generate the *sensus communis* in them. Time is a kind of acceptance and the existence of time proves the existence of God as the origin of acceptance. The anticipatory second person is the grammatical person of reconciliation, which reconciles the antagonism between the first and the third persons.

もっとも深い自覚ともっとも深い動機づけ

神の実在を確信できなくなった現代において、われわれが、ふたたび神に出会うのは、どのような道筋によってであろうか。現代に生きるわれわれは、「神は存在する」と言われても、にわかに信じることができない。われわれは、神のリアリティーから、遠く離れている。われわれが、神の実在が信じられないとき、われわれは、どのようにして、真実に生きることを選び、どのようにして、究極的な真実を目指すのであろうか。

われわれは、まず、深い自覚を持ち、その自覚に基づいて、深い動機づけを持たなければならない。

それでは、人間のもっとも深い自覚とは、なんだろうか。それは、一つには死の自覚であり、もう一つには罪の自覚である。人はどこまでも生きたいと願う。けれども、人はだれも死なねばならない。人はどこまでも自由に生きたいと願う。けれども、人はだれも罪を犯してしまう。人間のもっとも深い自覚とは、切実にここから生の充実を願うことと、その願いが、あるどうにもならない現実によって、裏切られたり、破られたりしていくということの、矛盾を自覚していくことである。そして、その自覚は苦しい。

人は、その苦しい矛盾の自覚と和解していけるだろうか。そもそも、そういった切羽詰まった、人生の破れは、和解を迎えうるものなのだろうか。むしろ、われわれは、和解を断念し、絶望の中で、最期のときを迎える覚悟をするべきではないのか。

そのように考えながら、思いつめて、われわれが、絶望の直前にまで、人生の歩みを進めるとき、われわれは、一人称と三人称の対立の問題に直面している。何かをここから願うということ、それを一人称の働き、もっとも一人称らしい働きであると、考えてみよう。すると、その一人称の切なる願いを破っていく働きは、そのもっとも残酷なものは、一人称からもっとも遠い人称である、三人称の働きであるということができよう。

生きたいという願いが一人称の働きなら、死な

ねばならないという客観的な事実は、一人称からしては、どうにも動かしようのない、三人称の事実である。死なねばならないという現実には、一人称を徹底的に突き放し、三人称の冷徹さで、事実のみを宣言する。

自由¹に生きたいというのが、一人称の働きなら、罪を犯してしまったという現実には、事後的には取り消しの効かない、客観的な、三人称の事実である。

ヨハネによる福音書に出てくる、姦通の現場で捉えられた女の話は、罪というものが、一人称と三人称の対立として立ち現れてくることを示している。女が行った行為の内面には、女の一人称の意向が、何らかのかたちで働いていたはずである。しかし、その一人称の行為は、白日の下にさらされ、社会によって対象化されてしまった。対象化とは、三人称化することである。ここでは、一人称と三人称が対立しているのである。罪とは、関係性の矛盾である。一人称と三人称の対立という、関係性の矛盾が露呈するのが罪である²。ルカによる福音書に出てくる、徴税人のザアカイは、一人称の行為として、自己の欲望にしたがった。しかし、その行為は、周囲から三人称的に見れば、罪であった。それは、一人称と三人称の対立の矛盾である³。

人間存在の深淵とは、一人称と三人称の対立の深く暗い闇である。その深淵の底はとても深く、暗い。

一人の人間にとっての、もっとも深い動機づけとは、その深淵から解放されることである。人間は自己の深い闇を知るとき、たしかに、そこから逃れようとする。しかし、人間が自己の救済をどこまでも求めるとしたら、その自覚は、現代社会の破綻の火急性に対して、きわめて鈍感だと言わねばならない。というのも、自己が闇から抜け出すのは、容易いことではない、という厳しい現実があるのである。その現実に対して、人間は、どうするであろうか。人間が一人であれば、どこまでも自己の救済を求めるであろう。しかし、人間は一人ではない。人間は社会に生きているのである。矛盾の深淵の虚無に驚いた人間は、必ず、

振り返る。そして、自分の隣にいる他者が、また、自分と同じように、どれほど苦しんでいるのかを、直ちに理解するのである。そして、人間は、そのとき、自己の苦しみを忘れて、苦しみからの他者の救済に、自己を投げ出してしまふ。それが、人間の究極の自己放棄であり、動機づけである。その動機づけこそ、もっとも深い。

要するに、自己の寄る辺なさに、本当に気づいた人間は、まず、何をするのか、ということなのである。まず、自己の救済を求め、そして、どこまでも自己の救済を求める、と答える人は、自己の自覚が、まだ、本当に深まっていないということを知らなければならない。今は、緊急事態なのである。それなら、自己の救済など、どうでもよいではないか。もし、わたしの愛する、ただ一人の、愛しい人が、救済されるのであれば、

というのも、人間にとって一番必要なことは、一人称と三人称の対立の和解を可能にして行く、二人称による媒介なのだが、われわれにとっての絶対的二人称である神は、現代社会では、われわれから遠く隠れているのだ。神が隠れているとき、われわれは、どうしたらよいのか。われわれは、相互に助け合わねばならない。われわれは、相互に自己放棄をし、他者にとっての二人称、すなわち先駆的二人称⁴として他者の矛盾の和解を手助けし、取りあえず、今ここにある、他者の危機を、たとえ応急処置程度の意味しか持たないとしても、回避して行く道を取らざるを得ないのだ。

そして、結論から言えば、その究極の自己放棄において、はじめて、神が人間に出会う。現代社会において、人間が神に出会えないのは、実は、もう、ほとんど限界状況に近いくらい、社会の闇が広がっているのに、その火急性に、人間が対処しようとしなないからである。社会が切羽詰まっているのに、余裕のあるような、欺瞞的な態度をとるからである。今ここにある危機を、無視するからである。隣人が苦しんでいるのに、余裕のあるような、態度をとるからである。隣人を愛せない現代人に、神は愛想を尽かしているのだ。

受容性の一方向性

社会というものは、実は、どこまでも壊れているものである。一人称と一人称が対立し、それが、「こちら側」から見れば）一人称と三人称の対立として、意思の疎通性を破壊している。だからこそ、受容性の問題（それは、すなわち、対立を媒介する二人称の問題である）が、人間関係の問題として、前面に出てくる。つまり、われわれは、社会的の中で、作為的に受容性を作って行かなければならない状況に、追い込まれているのだ。いったん壊れた、受容性を積極的に再発見し、再構築することが、人間性を確立し、社会を維持することなのだ。ところで、受容性とは、受動性ではない。受容性は、むしろ能動的だ。われわれは、能動的に受容性（二人称）を作成しなくてはならない。

たとえて言えば、われわれは、極北に生きているのである。極北では、人は、自然環境の受容性に身を委ねることができない。そこで、人間は受容性を作って行かなくてはならない。受容性がすでにそこにある、とする立場は、極北では通用しない。それと同じように、社会環境の受容性に身を委ねることができないとき、われわれは、精神の極北に生きている。受容性がきわめて乏しい社会では、厳しい努力をして、受容性を作成しなくてはならない。

それで、現代社会は、受容性を作成しようとして、安易な道に走り、疑似受容空間を飽くことなく、生産し続ける。しかし、現代の問題は、疑似受容空間の形成が、もはや、破綻しかかっていることなのだ。疑似受容空間というものは、「向こう側」の受容性をつねに当てにし、「向こう側」の受容性の真実性の確認を、ひたすら、先延ばしにしてしまう。現代は、そのような疑似受容空間の生成に、宗教までが参画してしまう、絶望的な状況なのだ。われわれは、本当の受容空間を求めて、出口のない閉塞感に、息もつけない状況にある。

なぜ、本当の受容性に出会えないのか。それは、受容性の本質である、受容性の一方向性という、

現実を無視するからだ。受け入れられることと、受け入れることの、本質的な、厳密な区別を忘れてしまうからだ。

「向こう側」に受容性としての二人称を定位しても、それは、可能性としては、どこまでも、幻想や虚構でありうる。つまり、受け入れられた、と強く念じて、それは、それだけでは、虚構かもしれない。確実に幻想ではない受容性は、受け入れられることではなく、受け入れることでしかない。少なくとも、疑似受容空間の蔓延の中で、確かな受容性は、「こちら側」が受け入れることとしてしか、取りあえず、確認できない。本当に、確かに目覚めた受容性は、「こちら側」が受容性としての先駆的二人称になるということのみである。

人生が幻のように見えるときがあるのは、どうしてなのか。それは、「こちら側」からのみ、「向こう側」の二人称を見ているからなのだ。視線を「向こう側」に向けるだけでは、虚構性と事実性の区別は、曖昧になってしまう。視線を向けるのではなく、視線を受け止めればいいのだ。「向こう側」に視線を向けるのではなく、「向こう側」の視線を受け止めればいいのだ。なぜなら、「向こう側」に受け止められているかどうかは、絶対的な確認の方法はないが、「こちら側」が受け止めているのは、絶対に、内面的に確認できるからだ。

おそらく、女性や黒人の指導者が求められる背景には、彼らが、視線を投げ掛ける存在としてよりも、視線を受け止める存在として、長い間、生きて来たことが、背景にあるのではないだろうか。受け止めること、受け入れることは、現実性の根拠なのである。

だから、人間にとって基本的なものは、受け入れて欲しい、ではなく、受け入れたい、であるべきである。ただ、「こちら側」が受け入れても、「向こう側」が同様に「こちら側」を受け入れてくれるかどうか、分らないから、多くの人が、不安になり、受け入れの態度を取ることに足踏みしてしまうのだ。しかし、神が受け入れるのは、他者を一方的に受け入れる人なのだ。だが、人間に

は不安があるから、それに踏み切れないで、途中で裏切ってしまう。神は、そこを人間に反省して欲しいのだ。一方的に他者を受容する、一方向性への実存的投企へと、神は誘っているのである。なぜなら、そのとき、はじめて、人は、神の一方向性と、実存的出会いが可能になるからである。そのような出会いが、先駆的二人称と先駆的二人称の出会いである⁵。

他者のための方法序説

受容性の一方向性は、人間存在の確立の、また社会性の基礎である。自己の確立ということは、実は、他者を前提としている。他者が受容してくれなければ、自己は確立しない。だが、他者は必ずしも、「わたし」を受容してくれるかどうか、分らない。だから、他者を当てにすることは、現実性というものを保証しない。しかし、現実性を保証できる、人間存在の確立の基盤がある。それは、わたしが、他者を、先駆的二人称となって受容する、ということである。わたしが、他者を受け入れるということは、わたしの決意によって定まることだから、わたしが、意思を曲げなければ、確実に定まる。人間存在の確立の現実性は、自己を確立しようとすることによってではなく、他者を確立しようと、意思することによって、安定するのである。

デカルトの方法序説は、一人称の一人称のための方法序説であった。しかし、自己が自己を確立することは、結局は、自壊する。自己の、自己による、自己のための意思は、自己が脆弱化すれば、いずれは敗れる。だから、われわれは、自己のための方法序説を確立しようとするのではなく、他者のための方法序説の確立へと方向転換して行かなくてはならない。われわれは、自己が、受容するものとしての、先駆的二人称として、他者の一人称を確立するため方法とならなければならない。自己とは、他者のための方法なのだ。

イエスの山上の説教は、そのような、他者のための方法序説だ。イエスは、先駆的二人称として実存し、その言葉によって、聞くものの人間存在

を確立しようとしている。しかし、その試みの中で、イエスは、聞くものにも、先駆的二人称となるように勧めている。なぜなら、神の国とは、お互いが、お互いにとっての先駆的二人称となり、お互いが、他者を確立することによって、社会が、愛の共同体になることだからだ。

われわれは、みんな、他者の人間存在を確立するために、生きているのである。お互いが、お互いを、確立し合うことによって、社会は安定するのである。一人称が自分自身で、一人称を確立しているのではない。先駆的二人称があるから、一人称が確立できるのだ、と理解出来れば、一人称も慎ましくなるではないか。自分の力で立っていると思うから、一人称は傲慢になるのだ。

共通感覚生成磁場としての先駆的二人称

人間が自己の存在を確立し、人間として、生きて行くためには、諸感覚が、共通感覚⁶によって統合され、世界がある自明な意味を持った世界として、立ち現れて来なければならないが、そのさい、諸感覚とは、五感のことだとされている。

しかし、五感というものを通底して、統合するためには、五感それぞれが持っている、感覚の能動性と受動性が、能動と受動の統合というかたちで、関係づけられることが、必要であろう。五感というものが、ばらばらにならず、統合されるという場合、その統合のきっかけというものは、どの感覚も持っている、能動的な面と受動的な面が、能動と受動の統合というかたちで、統合されるとき、その働きに連動して、五感が統合されて行くのではないか、と思われる。感覚の能動と受動は、例えていえば、作用と反作用のような関係をもっているといえるが、能動的な作用と受動的な反作用が関係づけられ、統合される過程で、五感を統合する共通感覚が作動するのではないだろうか。

すなわち、感覚の統合に二つの側面があり、一つは、五感の統合であり、もう一つが、能動と受動、働きかけることと働きかけられることの統合ではないだろうか。

ここで、能動と受動の統合という側面を、感覚

の問題から拡大して、社会的な能動と受動、という問題にまで、視野を広げてみよう。そうすると、能動は一人称から社会における他者への働きかけとなり、受動は、社会における他者から一人称への働きかけとなる。ところで、社会的には、コンセンサスは、一人称と三人称の通底、統合とも考えられるから、感覚における五感の統合と、社会における一人称と三人称の通底、統合を、ともに *common sense* という言葉でとらえる考え方を、能動と受動の統合という考え方を媒介にして、結びつけることができる。

しかし、社会的に、*common sense* が成立しない状態は、一人称と三人称がうまく関わりえない状態とも言え、そのような状態で、働きかけと働きかけられることが、感覚のレベルで、齟齬を生じた場合、五感の統合としての共通感覚も、うまく機能しなくなるのではないか、という推測が成り立つ。分り易い表現を用いれば、社会的環境とうまくやり取りができない場合には、人間関係にも、五感の統合にも、差し障りが出るのではないだろうか。

そのような意味で、社会というのは、*common sense* すなわち共通感覚の生成の場所であるともいえるが、よい社会とは、共通感覚生成磁場とも呼べるような働きを豊かに持った社会だと言えよう。では、そのような、磁場とは何なのか。それが、二人称であり、厳密に言えば、先駆的二人称なのだ。

共通感覚の統合の基盤としての、人称は、先駆的二人称である。しかし、それは、「向こう側」の共通感覚の統合の基盤としての、人称が、「こちら側」の先駆的二人称である、という意味である。なぜなら、「こちら側」の先駆的二人称は、「向こう側」の働きかけに対して、豊かに応答し、豊かに関わって行くからである。そのことによって、「向こう側」は、能動と受動の統合が、豊かに達成され、五感も、豊かに統合されて行く⁷。

イエスの山上の説教の第一声は、イエスが、そのような先駆的二人称として、実存していることを、証している。「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。」「心の

貧しい人々」とは、共通感覚の乏しい、心病む人々たちである。彼らは、共通感覚の成立基盤である、先駆的二人称にまだ出会っていない。しかし、イエスが彼らの前に、先駆的二人称として立ち現れた。だから、彼らの共通感覚は、これから回復し始め、豊かなものになっていく。この語りかけが、第一原理である。これは愛の語りかけである。わたしたちは、この語りかけを聴き、隣人に、このように語りかけるものとなる。

イエスは、どうして、そのような、他者のための、共通感覚の原点になれたのであろうか。イエスは、原共通感覚を持っていたのではない。原共通感覚とは、はじめ、豊かに花開いた、共通感覚とは、似ても似つかないものだ。それは、はじめは、ほとんど病的に痩せている。それは、ダイヤモンドの原石が、一見ただの石ころであるのと、同じように、見る人が見なければ、それが宝石であることすら、分らない。しかし、それは、確かに、「存在」した。しかも、それは、人称的に、二人称であるために、言語を媒介にして、自己表現するものでなくてはならなかった。それは、他者に語りかけるものでなければ、ならなかったのだ。それは、先駆的二人称を決意し、決して、その決意を翻さないという、意志であった。そのイエスの決意に神は豊かに応答したのである。

神の存在の時間論的証明

神の存在は、時間論的に証明できる。

しかし、そのためには、時間の本質を掴まなければならない。時間論にとって、まず、重要なことは、「待つ」ということの根源性である。われわれは普通、時間があるから、時間の中で、待つことが可能になる、と考える。しかし、それは、真相を逆転させた考え方だ。真実は、まず、待つものがあるから、時間があるのである。だれかが、待ち始めたとき、そこに時間が発生するのである。だから、時間があるということは、だれか、待ち始めた人格が、いるということなのである。時間があるということは、待っている人格が存在していることの、証拠なのである。人間的な時間ばか

りか、物理的な時間ですらそういえる。物理的なプロセスですら、待つことがあって、はじめて、可能になっている、と言えよう。だから、時間には、もちろん、始まりがあるわけである。だれかが、まず、「待つ」という決意をしたのである。そして、時間が始まった。そのだれかは、もちろん、神でなければならない。

なぜ、神は待ち始めたのか。それは、世界の完成、神の国の成就というものを目指して、待ち始めたのである⁸。だから、当然、待つことには、「待ち人來たる」という、成就のときがあるわけで、時間は、直線的でなければならない。時間が円環的なら、「待ち始める」ことは、意味がなくなってしまう。

わたしは、「待つ」という姿勢は、人称理論的に考えれば、先駆的二人称という姿勢である、と考える。神が、先駆的二人称という姿勢を取ったことが、時間生成の原因なのである。

われわれは、しばしば、物理的な時間の実在性に、恐怖を感じる。なぜなら、物理的な時間が実在なら、われわれは、人間的な時間が、冷たい物理的な時間の中に姿を消す日に、すなわち、人類が、そして生命が滅亡する日に、何もかもが無の闇に消えてしまう恐怖に怯えねばならない、と考えるからである。そして、その反対に、人間的な時間が実在なら、物理的な時間は、せいぜい、人間的な時間から派生した、本来的でないものとして、安堵できると考える。しかし、われわれは、物理的時間が実在だとしても、なんら怯える必要はない。なぜなら、物理的な時間ですら、「待つもの」としての、神の決意なしには、始まらなかったからである。だから、物理学ですら、時間がどのようにして始まったかとか、どのようにして維持されているのか、という、howの問いから抜け出して、なぜ時間があるのか、という、whyの問いを、問い始めるべき時期に、差し掛かっているといえよう。

時間ばかりでなく、空間の存在も、神の存在を証明しているといえる。なぜなら、空間は、受容性の存在を前提としているように見えるからである。受容性のもとで、空間は生成する。というの

も、空間があるから、何かが空間内に存在できるであり、空間があること自体が、受容性の存在を証しているのである。すなわち、空間は根源的受容性の存在を証している。

受容性とは、人称理論的にいえば、何の人称であろうか。ポップスの歌に「あなたの空を飛びたい」というタイトルの歌があるが、このタイトルは、あなた、という受容性が、空という空間を生成することを、比喩的に示している。しかし、二人称が空間を生成するのは、たんなる比喩ではない。人間的な空間だけでなく、物理的な空間ですら、なんらかの、受容する決意あるいは意志というものを、前提としているのだ。だから、物理学ですら、空間がどのようにして生成しているのか、というhowの問題を越えて、空間がなぜ存在しているのか、というwhyの問題を考慮に入れなければならない。

Whyの問題ということをいえば、数学ですら、もはや、whyの問題を避けて通れないだろう。次元とは、何なのか。三次元とか四次元とかいうものは、何なのか。次元の問題は、おそらく、次元はなぜ存在するのか、というwhyの問題へぶつかるだろう。次元というものは、おそらく、受容性と関連があり、受容する決意が次元を生成するのだ。当然そこに、人称理論的にいえば、先駆的二人称としての神の存在を考慮せざるをえない。

ところで、待つということは、時間的な受容性といえる。時間も空間も、受容性なのだ。そして、時空間は、受容する神を前提としているから、時空間の存在は、神の存在を証明している、といえる。

和解の人称

人生における、根本的な対立は、個々の実存における一人称と三人称の対立、また、社会における一人称と三人称の対立である。病気の問題、死の問題、罪の問題などが、実存を危機に追い込む。

学問における、根本的な対立とは、基本的に一人称の学である人文科学と、基本的に三人称の学である自然科学の、対立である。

それらの対立に和解をもたらすものは、受容性としての、二人称だが、その二人称は、「こちら側」が二人称となる、先駆的二人称でなければならない。なぜなら、確実な受容性は、先駆的二人称でしかありえないからである。「向こう側」が二人称であり続けるかどうかは、「こちら側」には分らない。しかし、「こちら側」が先駆的二人称であり続けることは、「こちら側」の決意によって、「こちら側」では確実になっている。

その、一方的な受容性としての、先駆的二人称が、和解の人称なのである。

神は、先駆的二人称であり、われわれも、先駆的二人称として実存する以外に、実存内の対立にも、実存間の対立にも、学における対立にも、和解をもたらすことはできない。

姦通の現場で捉えられた女は、先駆的二人称としてのイエスに出会ったことで、実存の和解を得ることができた。徴税人ザアカイは、イエスが、先駆的二人称としてザアカイに出会い、その一人称と三人称の対立を調停したことによって、実存の和解を達成した。そのとき、女もザアカイも、イエスに対面すると同時に、彼ら自身、先駆的二人称になっていたのである。

人間的な時間を解明する人文科学と、物理的な時間を解明する自然科学は、対立している。しかし、その時間概念の分裂は、どちらの時間概念をも成立させる、根源的な「待つもの」としての神を、先駆的二人称として捉えるとき、和解して行くのである。

他者の実存に、社会に、学の世界に和解をもたらす人称は、先駆的二人称である。

参考文献

- Buber, Martin (1979) 我と汝・対話 岩波書店
川津茂生 (2007) 先駆的二人称から見た存在 教育研究 49 21-29 国際基督教大学
川津茂生 (2008) 人称的構造の素描 教育研究 50 21-28 国際基督教大学
川津茂生 (2009) 一般人称理論へ向けて 教育研究 51 1-9 国際基督教大学
木村敏 (2005) 関係としての自己 みすず書房
Loewith, Karl (2008) 共同存在の現象学 熊野純彦訳 岩波書店

水田信（1999）森有正とマルティン・ブーバー：人称論をめぐって 比較思想研究26 61-64 比較思想学会
 森有正（1976）遠ざかるノートルダム 筑摩書房
 森有正（1977）経験と思想 岩波書店
 村岡晋一（2008）対話の哲学 ドイツ・ユダヤ思想の隠れた系譜 講談社
 中村雄二郎（1979）共通感覚論 知の組みかえのために 岩波書店
 Rozenzweig, Franz (2009) 救済の星 村岡晋一、細見和之、小須田健 共訳 みすず書房

注

- 1 自由の根源とは何であろうか。自由の深淵とは何であろうか。人間存在は、一人称と三人称の対立のゆえに、根本的な、不確定性、不安定性のもとにいるのだが、そのどちら側の肯定にも否定にも、偏る根本的理由を持ってないことが、人間的自由の呪縛であり、また、罪の源泉でもある。
- 2 一人称と三人称の対立の、関係性の矛盾が私的な内面性に凝結していくときに、こころの病いが発生するものと思われる。木村（2005）を参照。
- 3 罪をおかさなかったヨブの苦しみも、ヨブの一人称の主観と三人称の客観の不一致をどのように和解させたらいいか、分らないところから来ている。ヨブの苦しみは、たとえ自己の罪と死の問題を待たずとも、人生には、一人称と三人称の対立の苦しみがあることを示している。
- 4 二人称の問題は、Buber（1979）、川津（2007、2008、2009）、Loevith（2008）、水田（1999）、森（1976、1977）、村岡（2008）、Rozenzweig（2009）を参照。先駆的二人称は、川津（2007、2008、2009）の提出した概念である。
- 5 受容性を愛と言い換えるなら、愛には、「愛する」という方向性しかないのである。つまり、愛は、愛することしか出来ないのであって、愛されることは、「こちら側」の実存的決断によって、可能になることではない。愛されるかどうかは、「向こう側」の決断に依存している。だから、愛されるかどうかは、「こちら側」にとっては、絶えず、運命でしかない。そうであるなら、「こちら側」と「向こう側」が、お互いに愛し合うには、「愛する」ということと「愛する」ということが、運命的に衝突するということしか、実存的にはありえないのである。また、受容性としての愛は、ただ愛が強い、深い、だけでは済まされない。なぜなら、そもそも、罪に対する怒りは、愛すればこそなのである。ということは、愛すればこそ、怒りが治まらない、赦せないということがあるのである。だから、罪を赦すには、愛さえあればよい、とはいえない。罪を赦すためには、愛は、愛（の怒り）を乗り越え、超越的な愛にならなければならない。愛は、愛を突き抜けなければならない。愛は、（怒りの）愛自体を超越しなくてはならない。愛は、愛

を超越した愛になって、はじめて、真実の愛なのである。それは、受容できないほどの怒りの対象をも、受容するという、激しい苦悩のドラマを経験することである。実際、神は裏切っていく人をも愛している。怒り、しかし、それを凌駕する、愛の怒濤。激しい感情の逆巻き。裏切っていく人を愛せよ、と神は言っている。

- 6 共通感覚については、中村（1979）が論じている。
- 7 先駆的二人称が豊かに存在しない現代社会では、second person mimickerとしてのpsychopharmacologyが必要になるのではないか。あるいは、ポップスの歌などを聴いて、二人称に出会ったような気持ちになるという、仮想体験が必要になる。現代は、あまりに二人称が欠乏しているのだ。
- 8 神の国を待つのは、人間だが、神も待っている。神の国の完成には、神と人間の共同作業が必要なのだ。神も人間も、共同作業の完成を待っている。